idea

ニュースレター「イデア」

2021.12

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　近藤紀子さん・正信さん（後編）
3｜団体紹介｜　森林資源を活用する一関市民の会
5｜地域紹介｜　松川7区自治会（東山）
7｜企業紹介｜　株式会社いわい（にこにこプラザだいとう）（大東）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴⑰
9｜センターの自由研究｜　くらし調査ファイル№15「孫抱き」

今月の表紙
「玉切り」と呼ばれる状態で「薪棚」に積み重なる間伐材。よく見ると奥の方には「薪」として割られ、出番を待っている状態のものも。一般的に「薪」の水分量は15～20％が最適とされ、そのためには1～2年乾燥させることが必要なのだとか。間伐と間伐材の有効活用が推進される今、当市でも市民活動団体が動き出しています（団体紹介）。

idea ニュースレターイデア
発行　いちのせき市民活動センター　〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415　ホームページ:https://www.center-i.org/　メール:center-i@tempo.ocn.ne.jp
せんまやサテライト　〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736

おしらせ

情報　薪ストーブ用 薪の販売

本号団体紹介でご紹介した「森林資源を活用する一関市民の会」では、森林資源の循環活用の一環で、薪や燃料チップづくりに取り組んでいます。薪ストーブ用の薪（長さ40cm前後）をコンテナに詰めてご自宅まで配達します。お問合せは下記まで（右のQRコードからも問合＆購入可能）。

薪の樹種・価格（軽トラック1台分）：
＜針葉樹　薪＞　10,000円
＜広葉樹　薪＞　15,000円
＜配達料＞　2,000円
問合：070-4345-2244
（森林資源を活用する一関市民の会）

情報　興田市民センター（興田地区振興会）ホームページ開設

大東地域の地域協働体「興田地区振興会」では、FacebookやInstagramでの情報発信に加え、今年9月にホームページを開設しました。

市民センターや興田地区振興会の事業紹介、行事予定等が掲載されています。

下記URLか、右のQRコードからもご覧いただけます。

URL：http://www.okita.fun/
問合：0191-74-2201
（興田市民センター内
興田地区振興会）

イベント　令和3年度 興田地区生涯学習作品展「清流ギャラリー展」

興田市民センターでは、今年度の興田地区文化祭を中止としましたが、地域住民の芸術文化活動の成果を発表する機会として、1週間毎に1団体の作品を展示する「清流ギャラリー展」を開催しています。展示日程はホームページでご確認いただけます。

展示期間：～2022年1月30日（日）
8時30分～17時
※12月29日～2022年1月3日除く
※毎週月曜日に展示の入れ替え作業を行います。
会場：大東開発センター（興田市民センター：大東町鳥海細田19-2）
問合：0191-74-2201
（興田市民センター）

発表会　岩手県南史談会 研究発表会2021

岩手県南、宮城県北の地域史の調査・研究を目的とする「岩手県南史談会」では、毎年、研究発表会を開催しています。今年度は「石蔵山最明寺境内発見の板碑について」など、3つ（3人：畠山篤雄氏、大島晃一氏、東資子氏）の研究発表を行います。どなたでも聴講可能で、参加費無料、予約も不要です。

日時：2021年12月11日（土）
開場　9時30分
発表　10時～12時
会場：一関文化センター　小ホール
（一関市大手町2-16）
問合：0191-24-3741
（岩手県南史談会事務局・大島）

情報　清庵の里 YouTubeチャンネル開設

建部清庵の顕彰活動を行う「清庵の里」では、青少年育成事業の一環として、動画配信サイトYouTube上に「清庵の里チャンネル」を開設しました。清庵が著した『民間備忘録』『備荒草木図』の中で紹介された救荒植物の活用方法等を発信していきます。第1回目は「どくだみジュースの作り方」で、右のQRコードからご覧いただくか、YouTubeにて「清庵の里チャンネル」と検索してご覧ください。

問合：0191-23-3434
（清庵の里事務局・小川
（一関商工会議所内））

講座　自治会長サミット Vol.13

自治会や民区、集落公民館など、地縁活動を担う組織の3役レベルのみなさんに向けた情報交換の場「自治会長サミット」。今年度第2回目（通算13回目）は下記内容で開催します。詳細はお問合せください。

日時：2022年2月4日（金）
＜昼の部＞15時～17時
＜夜の部＞18時30分～20時30分
場所：川崎市民センター
テーマ：「役の交代・なり手について考える～本気で役を交代したいときに、どう交代するか～」
参加料：無料（1週間前までに申込）
問合：0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「直近の出番は昭和62年」

大東町曽慶2区地内にある半鐘（昭和40年に現在の場所に移設）。地域の消防団を招集するとともに近隣住民に危険を知らせる大切な存在です。半鐘は地域毎に打ち方が定められ、火災の大まかな場所や災害の種類が分かるようになっているというので驚きです。

旧町村別の人口動態等を共有します。

2021年11月1日付
（2021年10月31日現在
住民基本台帳より）
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	111993	-56
世帯数	46345	-3
出生数	42	-3

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	55403	3	24420	-2
花泉	12443	3	4723	0
川崎	3389	-7	1284	-4
千厩	10187	-16	4103	-6
大東	12449	-22	4932	-2
東山	6162	-3	2299	-2
室根	4584	-7	1784	6
藤沢	7376	-7	2800	7

157
158 / 111,993

近藤紀子 近藤正信

開拓整備の拠点として自作した作業小屋

地方で第２の人生を送るため、東京都中目黒で生活していた平成20年に花泉町日形の桑畑跡地を購入。60歳の定年を迎えるまでは東京と一関を行き来しながら開拓を進め、平成28年に完全移住。住居はログハウスのキットを購入し、基礎以外はセルフビルドに挑戦。集落活動にも参加しながら、夫婦水入らずで日形での暮らしを楽しんでいる。

第90回　花泉町日形在住　近藤紀子さん・正信さん　×　いちのせき市民活動センター　主任支援員　佐々木牧恵

生活における「便利」の価値基準
～東京生活60年以上の夫婦に学ぶ一関【後編】～

一関市の「移住定住」に関する情報を発信するＷＥＢサイトに記載された当市のきく３つ。「文化と美しい自然が共生するまち」「都会からのアクセス」「充実したインフラ（豊かな教育環境、安心の医療施設、充実した商業施設）」。果たして実際に当市への移住を決めた人の「決め手」となったものは一体何なのか、そしてそこから見えてくるものとは？（２回シリーズの後編）

佐々木　東京へのアクセスが良いということ以外に、移住の決め手となったものはありますか。

紀子　当初は千厩も検討してたんですけど、交通が日形に比べると不便なのと雪が多い。住所を書くのに花泉は簡単だし、字面がキレイ！

正信　当初から条件の一つにしていたのが「雪が降っても屋根の雪下ろしをしない場所」。年を取ると雪下ろしの事故が多いので。東北で屋根の雪下ろしをしなくて良い里山となると、限られてきますよね。

佐々木　確かに、一関は移住者にはハードルが低いのかも。特に花泉は雪が少ないですしね。字面の良さは盲点でした（笑）

紀子　花泉は本当に穴場よ。土地も物価も高い宮城県の隣なのに、土地がものすごく安い！

佐々木　この土地はどうやって見つけたんですか？

紀子　インターネットに出ているのをたまたま見つけて。当時は花泉なんて知らないし、樹木葬で馴染みのあった「一関」で検索してました。でも一関は情報発信が地味よ。宣伝が下手。

正信　移住を促進するＷＥＢサイトも、東京のデザイン会社と一緒に作った方が良い。リモートでできるんだから。

紀子　要は発想が逆なのよ。受入れ側のイメージではなく、行きたい側のイメージで見せないと。地方に移住者が求めるのはやっぱり自然環境なんだから。

佐々木　そう言われて当市の移住に関するＷＥＢサイトを見ると、確かに視点が違うのかも…「充実した商業施設」とも謳われてますが……（苦笑）

紀子　充実した商業施設を望む人は都会で暮らすわよね（笑）

正信　僕はＩＴ関連の仕事をしていたけど、昔から地方でテレワークをしたかった。都会は人がごみごみしているし、環境は悪いし、街の中もお店の中もガンガン宣伝や音楽がかかっていてうるさい。地方でテレワークをしたい人は絶対にいるけど、受け皿が整っていないですね。

佐々木　コロナ禍でそうした動きがあるとは言いますが、地方在住者としては半信半疑。本当にそんな需要あるのかな？と。

正信　ＩＴや事務系のサテライトオフィスのようなものは充分需要がありますよ。本社は東京で、月１～２回出社すれば良い。新幹線で簡単に出社できる。

紀子　狙い目はのびのび子育てをしたいという世代じゃない？

正信　今はリモート対応の学習塾もたくさんある。マンツーマンの指導がリモートで地方にいながら受けられるわけだから、教育レベルを東京レベルにできるということ。

佐々木　自然豊かな地方で暮らしながら、教育はリモートで東京レベル……。なるほど……。

紀子　あとは定年直後の元気な中高年よね。私たちもそうだけど、定年直後に移住すると、移住先では十分若手に入る。仕事もしていたわけだから、ある程度のことには対応できるし。

佐々木　集落の即戦力ではありますね。ただどうしても、中高年層の移住だと「一代で終わり」というイメージが……。

紀子　でも子ども連れで移住してきても、多くの子は18歳くらいで地域を出るし、子どもが戻ってくるとは限らないでしょ。そうであれば、中高年層の移住者が同じような移住者につないでいくのも良いのかなって。

佐々木　確かに、子どもを増やすことが目的ではなく、最低限の集落機能を維持していくためにある程度の人口が欲しいのであって、即戦力の中高年の方が良いという考え方も頷けます。

正信　僕たちは本当に即戦力。退職して間がないので体力も気力も十分だし。

佐々木　今はお元気に車も運転できるから良いですが、運転できなくなった時への不安はないですか？

紀子　東京の都心でも今は移動販売が来るの。地方にいても都心にいても、交通の足問題は変わらない。ただ都会は人数が確保できるからコミュニティバスなどが出しやすいというだけ。それにここで暮らしていると忙しくて弱れないわよ（笑）東京で暮らしていた私の両親は認知症になってしまったけど、ここではお年寄りも本当に元気。

佐々木　お二人からは暮らしそのものを楽しまれている感じが伝わってきます。

紀子　私ね、「変わっている」と思われたくて仕方ないの。「あの人変わってるからしょうがないよね」と、そのまま受け入れて欲しい。新参者だからって変に馴染もうとすると、お互いに無理しちゃうから。

正信　うちはお風呂と暖房は薪。シャワーは太陽熱温水器。台所と小型湯沸かし器のガスは自分でガス屋さんに持って行って充填してもらう。そうするとかなり割安になる。

紀子　「しみったれ」なのよ私たち。わざとそういうことをして楽しんでるの。

佐々木　実はそういう暮らしに憧れている地方在住者は多いと思うんです。できる環境に暮らしていながら、ご近所の目を気にしてできないとか。変に格好つけずに「地方暮らしならではの楽しみ」をもっと発信したり、実践すべきなのかもしれません。

紀子　移住者の先輩で都市部に家を残したままこちらに家を建てた方がいます。空き家もうまく活用すれば２か所居住する人もいると思います。こっちは「遊び場」として活用していくとか。

正信　移住奨励金のようなものを決め手にする移住者は少ないと思いますよ。現に僕たちも一関への移住を決めてから知りましたからね（笑）

※近藤夫妻の開拓の記録を綴ったブログ
「のーてんき夫婦のログハウス狂想曲」
で検索！

団体紹介

森林資源は地域のエネルギー

森林資源を活用する一関市民の会

森林資源を活用する一関市民の会
平成29年11月発足。一関市内の山林から切り出した間伐材や工事伐採材等の集材、加工を行い、地域の地産地消エネルギーとして資源循環させる活動に取り組んでいます。現在の会員は43名（令和３年９月10日現在）。

〒021-0803　一関市南十軒街11-2
TEL：070-4345-2244（専用電話）FAX：0191-23-5710
ＨＰ：https://sinnrin.web.fc2.com/index.html

写真：令和３年度総会の集合写真（令和３年９月撮影）

「暮らし」に欠かすことができなかった山林が

一関市の森林面積は７８９１９ｈａと、市の総面積の６２・８％を占めていますが、[※1]木材価格の低迷や林業労働者の高齢化、松くい虫の被害拡大などにより、森林所有者の林業に対する意欲が衰退し、間伐等の整備が遅れている森林が増加しています。

間伐を行わないと、樹木同士の成長を阻害するだけでなく、太陽光が差し込まないことで土地がやせ、根をしっかり張ることができないため、土砂崩壊等の災害が発生しやすくなります。また、間伐を行っても、その間伐材が山にそのまま残されることも。間伐材を林外に搬出するには費用がかかり、その費用に見合った収入を得られないという現状が背景にあります。

そうした資源を有効活用し、当市の豊かな自然環境を次世代に引き継ぐべく活動しているのが「森林資源を活用する一関市民の会」です。会長の千葉康生さんは、「昭和40～50年頃に植林した木は今が伐期。だが、今の住宅は鉄筋コンクリート造りが多く、木を使うことは少ない。暖房も昔のように木炭や薪を使うことがなく、電気・ガス・石油で済む。今の子どもたちが木の温もりや雰囲気、香りを感じる機会が減っているのはとても寂しい」と語ります。

※1　令和元年度版「岩手県林業の指標」より

現場作業は楽しむことが大事

当市では、平成28年10月に県内初となる「一関市バイオマス産業都市構想」[※2]の認定を国から受け、市内に豊富に存在する木質バイオマスを活用しながら、資源・エネルギー循環型のまちづくりを推進していますが、より一層、木質バイオマスを地域に根ざしたものにすべく、行政と一緒に活動に取り組む市民有志を募り、結成したのが同会です。

同会の主な活動は、間伐材や支障木、工事伐採材の集材活動のほか、薪の製造・販売、市内各所で行われるイベントに出向いての木質バイオマスPR活動（薪割り体験会、薪ストーブの実演会等）など多岐にわたります。

会員は、厳美から室根まで市内各地に点在するため、どの地域に住んでいても活動がしやすいよう、活動拠点を3か所[※3]設け、拠点に原木を集材し、薪づくりなどを行います。また、会員の多くが農業にも携わっていることもあり、会としての活動は農閑期の10月～3月（月2回ほど）に集約。千葉さんは、「会員のほとんどが高齢だが、みんなで楽しく作業している。嫌々やっていては、会として続かない。まずは楽しむことが大事」と笑顔で話します。

※2　バイオマス産業都市とは、地域に存在するバイオマスを原料に、収集・運搬、製造、利用までの経済性が確保された一貫システムを構築し、地域の特色を活かしたバイオマス産業を軸とした環境にやさしく災害に強いまち、むらづくりを目指す地域で、当市は事業者や学生などからなる「バイオマス産業化推進会議」で議論を重ね、構想案を作成した。
※3　【厳美・萩荘地域】旧達古袋小学校敷地内／【大東・東山地域】東山町長坂字久保地内／【室根・藤沢地域】藤沢町保呂羽字栗沢地内

限りある資源を無駄にしないために

市と連携し、木質チップボイラーの燃料となる木質チップの原木集材にも取り組んでいる同会。会員が山林や工事現場等から切り出された木材を運搬し、市内のチップ製造業者へ引き渡します。それらを利用した木質チップは、木質チップボイラーが設置されている一関市立千厩小学校、東山小学校でも使用されるため、資源の有効活用はもちろん、児童たちの学校生活と里山再生の一助にもつながり、同会にとって誇らしい活動の1つとなっています。

千葉さんは、「山林に残されている間伐材などは、薪や木質チップとなって、私たちの生活に欠かせないエネルギーに変わる。この活動は間伐材の需要を開拓することにもつながり、将来的には、雇用の面にもつながるのでは」と期待を寄せます。

市の施策で結成され、事務局長が市の「木質資源地域活用推進員」を兼ねていたことから、事務局窓口を市役所農地林務課としていた同会でしたが、令和3年度からは事務局長の千田雅明さん宅へ窓口も移し、市民団体として独立。千田さんは、「木質バイオマスをもっと身近に感じてもらうのが自分たちの役目。薪の販路拡大やイベントへ参加するなど、これからも積極的に活動を続けていく」と今後の抱負を語ります。

地域の資源を「地産地消エネルギー」として循環させることを目標に活動している同会。今後も「市民による地域に根ざした木質バイオマスの利用」に取り組んでいきます。

Q.活動において大切にしていることは？

会長

A. あるものを最大限に使う!!

千葉康生（ちば やすお）さん
一関市萩荘の赤猪子在住。現在は自宅裏の山林を自分好みに改良中です。岩手県森林整備協同組合の代表理事も担っています。

事務局長

A. 楽しく継続

千田雅明（ちだ よしあき）さん
元々は観光関係の仕事に就いていた千田さんは、縁あって同会の事務局長を任せられることに。林業初心者として日々勉強中です。

- Photo gallery -

薪割り体験会
市内各所のイベントに出向き、薪割り体験会を実施。普段は体験できない薪割りに子どもも大人も夢中です。

出番を待つ薪たち
各拠点には、薪棚が設置され、多くの薪が積み上げられています。薪は約2年間の自然乾燥を経てから出荷されます。

お揃いのユニフォーム
オレンジ色が目立つ防護服は、チェーンソー等から体を守るために着用。背中には同会の名前がプリントされています。

「木の駅」設置
市内の道の駅、産直などに「木の駅」と題した薪やウッドキャンドル等の販売・展示コーナーを設置中（令和2年度から）！

集落の歴史文化・営みを受け継ぐために

東山　松川７区自治会

松川７区自治会（松川）

行政区は「松川７区」。73世帯186人が暮らす。自治会は会長、副会長、理事（５人）、事務局、監事で構成され、理事が部会（総務、納税、環境衛生、保健体育、交通安全・防犯）を担当する組織体制。班数は８班。

左の写真：市民センター周辺の環境整備の様子（令和３年６月）

奥州藤原文化の歴史が残る地域

元旦の早朝。平安時代、藤原氏に献上したとされる「清水」が湧き出る「磐井清水」にて、「若水（元旦の朝に初めて汲む水）」が桶に汲まれます。極寒の中、その若水桶を地につけることなく、約20㎞先の平泉・中尊寺まで歩いて届けるこの行事は「磐井清水若水送り」と呼ばれ、奥州藤原氏にまつわる古事の再現として約30年前にはじまりました。毎年１００人以上の参加者が２つの峠を越えながら中尊寺に向かいます。

この「磐井清水」がある卯入道平を有するのが松川７区自治会。砂鉄川と県道東山薄衣線沿いに広がる同自治会内には、磐井清水のほかにも岩手県の指定有形文化財「木造来迎阿弥陀及び菩薩像（二十五菩薩像）」や一関市の指定文化財で樹齢４５０年以上の杉並木「宗松寺参道」などの史跡や、ひがしやま病院、老人保健施設、松川市民センター等の公共施設も。

「若水送りには、地域の小学生から高齢者まで、さらには地域外の賛同者が集います」と笑顔を見せるのは同自治会長の安東正利さん。自治会長のほか、「磐井清水若水送り」の実行委員長や松川地区の秋の恒例行事「どんこ市」の実行委員を務めるなど多様な分野で地域を支えています。

数年前までは大相撲「東関部屋」の夏合宿のお世話をするなど、文化的な資源が豊かな松川地域の中心地とも言える同自治会の取り組みについて伺いました。

部会を主体に集いやすい環境を作る

５つの部会が主体となって事業を行う同自治会。各部で事業を持つものの、参加者の負担を少しでも抑えられるよう、部会間で連携をとり、抱き合わせ開催を多く取り入れています。

例えば、独自の自治会館がない同自治会では、松川市民センターを随時使用しているため、環境衛生部会が年１回、市民センター周辺の環境整備を行います。この整備作業に抱き合わせて開催するのが交通安全・防犯部の「交通安全・防犯講話」。作業終了時に、駐在所所長や交通安全協会、防犯協会の関係者を講師として交通安全や特殊詐欺防止等についての講話を聴講しています。

２月には、保健体育部会の主催で「ニュースポーツ大会」を開催。吹き矢や輪投げなど、誰でも挑戦することができる競技を楽しみます。以前は市民センター体育館を会場にしていましたが、参加者からの「冬の体育館は寒い」などの声を受け、暖かい和室に変更したのだとか。住民の声に柔軟に対応しながら、約10年続けています。

このニュースポーツ大会の際も交通安全・防犯部と連携し、消防署員を講師に迎えた「防災セミナー」を開催。住民が集う機会に繰り返し開催することで、より多くの住民に情報を届け、防災・防犯意識の向上を図っています。

そのほか、納税部が主催する「松川７区自治会・納税組合研修旅行」も住民の楽しみの１つ（令和２、３年は中止）。例年30人程が参加します。旅先では、自治会副会長の小野寺秀雄さんがＪＲ職員時代に培った話術を発揮し、楽しい思い出づくりに貢献しています。

「できること」を続け、「交流」を生み出す

「磐井清水若水送り」は「保存会」と「実行委員会」とがあり、自治会としての関わりではなく、地元住民として多くの人が携わっています。「磐井清水」周辺に住む家の女性有志が「延命そば」と呼ばれるそばを参加者にふるまったり、男性有志は行列に参加したり、道中にある各番所（休憩所）の運営などに協力します。「若水」を桶に汲む役は、同集落の小学生が担っていましたが、近年は小学生が少なくなり、近隣集落から協力を得ることも。

安東さんは「（少子高齢化が進むと）いままでのように継続するのは難しくなってくるでしょうが、今後は若い方に引き継ぐことも考えています」と、事業継承のあり方を模索しています。

自治会事業も、コロナ禍でそのあり方を模索しています。例年１月に開催し、40人程が集まる新年会は、会そのものは中止したものの、年祝い及び米寿の方への御札やお祝い品の贈呈だけは実施。また、地域協働体や体育協会事業への参加、交通安全運動への協力など、「できること」を可能な限り続けてきました。その背景には、地域住民からの「集まる機会がなくなることが不安」という声があります。

文化的な資源に溢れ、多様な交流が行われてきた同集落では、交流機会の創出に重きを置きながら、時代の変化に適応していきます。

Q.集落の自慢は何ですか？

自治会長

A.感謝

あんとう　まさとし
安東正利さん

４期７年目。自治会発足前から納税貯蓄組合の事務局・会計を担当。自治会発足後も事務局、副会長を歴任し、現職に至ります。

副会長

A.ふれあい

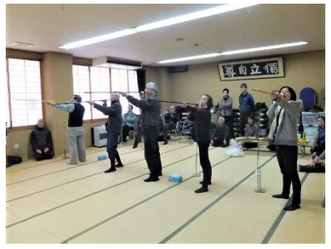
おのでら　ひでお
小野寺秀雄さん

40歳頃に帰郷、50代前半に自治会監事へ。退職後、理事（交通安全・防犯部会担当）を３期務め、今年度からは副会長として会長を支えています。

- Photo gallery -

「若水送り」の出発点

同集落の小原家が代々管理している「磐井清水」。来年は30回目（29回目は役員のみで開催）の節目であり、開催検討中です。



冬の運動不足解消！

和室で行う「ニュースポーツ大会」は、お孫さんと一緒に参加する方もおり、世代間交流の場にもなっています。

いい汗流した後は……

ニュースポーツ大会終了後の防災セミナー。継続した防災活動により平成29年度「優良自主防災組織」で表彰されました。

地域の宝「二十五様」

「二十五様」と呼ばれ親しまれる「二十五菩薩像」。この収蔵庫周辺も市民センター周辺と合わせて整備作業を行います。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴⑰

「文化活動」は後回しにしてはいけない

地域の「困りごと」が増え、**‘課題解決のための地域づくり’**が優先的になっている今ですが、**「地域文化」「文化活動」**にも目を向ける必要があります。

‘課題解決の時代’なので、少子化対策や高齢化対策、コロナ対策などが優先順位の上位となり、「地域文化」に関する取り組みや「文化活動」は後回しにされがちです。しかし、**「地域文化」とは‘その地域の成り立ち’であり、「特色」**です。**「地域らしさ」**と言い換えることができます。「地域らしさを活かした地域づくりを！」という合言葉もよく見かけますし、**「地域文化という視点」は忘れてはいけないもの**なのです。

文部科学省の「文化審議会文化政策部会」がまとめた報告書『地域文化で日本を元気にしよう！』の中で、「地域文化を振興する意義」の１つが以下のように述べられています。

地域の豊かな自然や言葉、昔から親しまれている祭りや行事、歴史的な建造物や町並み、景観、地域に根ざした文化芸術活動等は、それ自体が独自の価値を持つだけでなく、住民の地域への誇りや愛着を深め、住民共通のよりどころとなり、地域社会の連帯感を強めることにも資することから、地域づくりを進める上で重要な役割を有するものである。

当センター情報誌『idea(この冊子)』の『センターの自由研究』では、「地域文化」に関連する様々なテーマで調査を行っていますが、毎テーマ学ぶことが多く、興味深いことばかりです。**歴史や文化など‘地域の成り立ち’を知ることは、その地域に住む人の‘人間性’の形成につながるような気もします。**

広くなった一関市は、旧町村(大字単位だったりもします)ごとに「地域文化」があり、‘一関市’としてのシンボル的な価値の創出が難しくなっていることは否めません。結果的に、「郷土の偉人には〇〇もいます、〇〇もいます」「地域文化には〇〇があります、〇〇もあります」と、羅列するような状態に。それは仕方がないことですが、そこに**「市民活動」としての「地域文化に関する取り組み」が強化されたら、もっと市民の意識も変わるんだろうな**と思ったりします。

子どもの頃から郷土学習を……と、学校で地域文化学習は行われていますが、子どもだけに負荷をかけるのは我々としては好みません。もっと**大人世代(青年層や壮年層)がしっかりと郷土に目をむけるべき**なんです。市民が地域文化からかけ離れて生活をしているため、地域への愛着や「一関と言えば〇〇」というような市民の共通認識が薄い……すなわち**「文化価値の創造力」**が弱いと感じています。

以前、大東町渋民地域で**‘地域文化が地域住民を育てている姿’**を目の当たりにしたことを、いまでも鮮明に覚えています。「地域づくり計画」策定のため、中学生を対象としたワークショップを開催した時のことです。参加した中学生たちが口々に、「東山先生」と言うのです。東山先生というのは、渋民地域が輩出した刑法学者・芦東山のこと(芦東山については当センター情報誌idea(2020年11月号)「センターの自由研究：末裔調査ファイルNO.1」をぜひご参照ください)。江戸時代の芦東山を、いまの中学生が「東山先生」と呼ぶことにカルチャーショックを感じましたが、地域で芦東山を称え、「東山先生」と呼ぶことができる……これは立派な**「地域性」**です。市内の様々な地域を見ていますが、地域の偉人を「先生」と呼ぶ光景は、当市では大東町渋民以外で見かけたことはありません(あったらごめんなさい)。

「地域文化」は**‘心豊かな生活’**を送るための一助となり、合唱や演劇などの文化芸術活動、ストリートカルチャー等もまた同様です。**鑑賞する人、演じる人それぞれが「文化活動」を通して心が豊かになる。そして、共感する人が集まり、文化振興のエネルギーが高まることで、「地域」や「まち」の‘イメージ’が形成されていく**ものと思っています。

‘合唱のまち一関’という割には、日常生活の中で合唱と巡り合うことがありません。路上で練習したりすることで、まち中にハーモニーが溢れ、市民と合唱の架け橋になり、共感を生み、「参加してみよう」となる……。**身近なところから文化活動に親しめる土壌づくり**が、いまの一関には必要なのではないでしょうか？
そのためには、**積極的になる**しかないのです。

数年前から地元集落の獅子舞に加わった筆者(センター長小野寺)ですが、関わって初めて知るその奥深さを心身ともに感じています……(腱鞘炎が育てる郷土愛)

企業紹介

大東 株式会社いわい（にこにこプラザだいとう）

東北４県と新潟県で「医療・介護・予防・教育等」に関する福祉サービスを展開する「ＳＧグループ(東北医療福祉事業協同組合)」が運営管理母体である株式会社いわい(代表取締役 田中信幸)。同グループに所属していた「有限会社介護だいとう(大東町の旧猿沢診療所で事業展開)」と、「有限会社介護ひがしやま(東山町の旧やすらぎ荘(特養)で事業展開)」が平成22年に合併、株式会社化。「にこにこプラザだいとう」「にこにこプラザひがしやま」と改称し、デイサービス(通所介護支援)、グループホーム(認知症対応型共同介護)、居宅介護支援事業所を展開中(現在の職員数は99人)。

高齢者介護事業所が担う「子どもの居場所づくり」

職員ニーズと地域ニーズ双方に応えて

子育て世代、これから子育てを経験するであろう若者世代の雇用を促進し、仕事と家庭の両立を目指す同社では、福利厚生の充実を図るとともに、その活動の範囲を「地域」へと広げています。

きっかけは令和2年の猿沢地区新年交賀会(猿沢地区振興会主催)。にこにこプラザだいとう管理者の佐藤竜哉さんは同席した地元保育園長から「卒園～小学校入学までの約1週間、子どもの預け先がないと悩む保護者が多い」という現状を聞きます。

ちょうど同社では人材不足解消を解決すべく、福利厚生の一環で、職員の子どもを対象に、長期休暇期間の預かり事業を検討しており、同年の春休みに試験的に預かりを実施。施設内の空き部屋を利用し、子どもたちの居場所を創出しました。

すると同年4月、それを耳にした猿沢小学校長から、職員以外の子どもの預かりについても打診が。しかし、コロナ禍における職員以外の子どもの預かりは、主事業の高齢者支援に支障が出る可能性がありました。

そこで「より広い場所を借り、地元の課題に企業として応えていけないか」と、同年夏、猿沢市民センターを利用し、職員の子ども以外も受け入れての「にこにこ児童クラブ」を開設。利用家庭からも継続を望む声が上がる中、課題となったのが施設利用料。企業の長期利用はどうしても高額になってしまいます。

継続開設を諦めかけた矢先、猿沢市民センターの管理運営を受託している猿沢地区振興会から「子どもの預かり事業をタイアップしませんか？」という誘いが舞い込みます。同振興会の事業として開催し、その運営を同社が行うという仕組みです。

こうして令和3年の春・夏休み、同社職員に加え、教員ＯＢや高校生などを「見守り支援員(有償ボランティア)」とし、猿沢地区振興会主催の「にこにこ児童クラブ」が開設されるに至ったのです。

離職率ダウンだけでなく将来の夢にもつなげて

職場近くに子どもの居場所ができ、安心して仕事に従事できるようになった結果、悩みの種であった離職者は2年間０人を達成！

また、施設統括管理者の菊地浩彰さんは「職員の子どもが親の働いている姿を見ることで、『介護』という仕事に興味を持ってくれることにも期待している」と言い、「当社が所属するＳＧグループには看護学校もあり、人材育成につなげることもできる。実際、ボランティアに来ている高校生の中には介護士や看護師、子どもと関わる仕事に就きたいという子もいます」と、事業の波及効果を感じています。

児童クラブで練習した「よさこい」を、施設利用者に披露し、高齢者との交流会を行うなど、本来事業の充実にもつながっている子どもの居場所づくり事業。「今後も継続的に地域の声を拾いながら、企業・地域どちらにとってもより良い事業にしていきたい」と、今後の継続的な開催にも意欲を見せています。

1 「にこにこプラザだいとう」職員のみなさん(一部)
2 「にこにこ児童クラブ」の様子
3 地産地消の考え方を基本に、調理員が季節にあった家庭的な調理を提供することが同社のこだわり。

DATA
〒029-0431
一関大東町猿沢字板倉60-1
にこにこプラザだいとう
TEL 0191-71-4166

センターの自由研究

ミッション62 くらし調査ファイルNo.15 「孫抱き」

初孫が生まれた時などに、親戚や近隣住民を呼んでそのご披露をする「孫抱き」。当市域の風習の１つと言え、ごく当たり前のこととして行われていた時代もあったようですが、最近では「孫抱き」という言葉自体を知らない人・世代も増えてきています。また、その内容も時代とともに変化し続けています。そこで、市内各地で「孫抱き」に関するヒアリングを行い、その「スタンダード」を整理してみました！

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■「孫抱き」とは？

東北地方、特に岩手県南で盛んに行われている（諸説あり）という**「孫抱き」**。**「孫ぶるまい」「孫抱きぶるまい」**と呼ぶ地域もあります。「孫」という位置づけの通り、**主催はその家の祖父（祖父母）**で、自分たちの孫を親類、近隣のみなさんにご披露し、お祝いしていただくという風習です。

この「孫」は、いわゆる**「内孫」**であり、「外孫」の際には行いません。また、内孫であっても、**「初孫」**の際に行う場合と、**「家督（＝長男）」**の誕生の際に行う場合とがあり、当市域の中でも分かれました。中には内孫全員を孫抱きしたというお宅も！

開催のタイミングは様々で、市内各地の孫抱き経験者にヒアリングを行ったところ、出産で**里帰りをしていたお嫁さんが赤ちゃんと共に戻ってきた時**（生後約１か月～３か月頃）に行われたという話や、**首の座った頃**（生後３か月頃）に行われたという話がある一方、文献には**出産７日目**に行っていたという記録が。近年では、１歳を過ぎた頃に「一生餅（一升餅）祝い」と合わせて行うパターンもあるようです。

■150年以上前から

いつ頃から行われていた風習なのかを知るべく、各種文献を確認したところ、最も古い記述が大正５年発行の『真瀧村史』。そこには**「初孫の生れたる時、その一週間目に両家の近親者を呼びて祝う。この風、維新前迄は必ず行われたる模様なりしが、今日は稍々に廃して中流の者にても行う者少なきに至れり」**という記載が。

つまり、旧真滝村（現在の一関市真柴・滝沢・狐禅寺・三関エリア）では今から１５０年以上前には行われていた風習であることは確認できましたが、いつ頃から行われるようになった風習なのかは確認することができず……。むしろ、大正５年頃には中流階級の家であっても行われなくなっていた、という意外な事実が。

とは言え、当センターが行ったヒアリングでは、最も直近に孫抱きを経験した人が３年前（弥栄地域）。少なくなったとは言え、現在も行われているのです。市内の冠婚葬祭を執り行う会館等でも**「孫抱きプラン」**などが用意されているなど、カタチを変えながらも、現代に続く風習なのです。

女性がゲストになれる数少ない機会

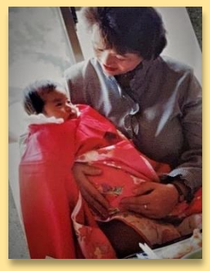
「孫抱き」同様、当地域で盛んに行われていた「嫁取り」では、祝言の場に列席するのは男性が多い（2020年idea７月号参照）のに対し、「孫抱き」では**女性が参加**するのが一般的なのだとか！ヒアリングによると、昭和中期頃までは、**ご案内そのものは家長宛に届くものの、実際に参加するのは女性（しかも年配の）だった**ようです。

背景としては、**「列席者が赤ちゃんを順番に抱いていく」**という流れがあったことから、生後間もない赤ちゃんを抱くことに慣れている年配の女性が好まれたのではないかと推測。そのため、「嫁取り」のようにかしこまった式次第ではなく、和やかな会だったという話も。

ちなみに、男性参加者が『孫振る舞い』という謡曲を披露することもあったとか！

※歌詞【此の家お孫の　御名は何と　倉が九つ　倉の助　此の家お孫の　お着物見れば　黄金じらしに　銭の紋】

これらをふまえ、**「嫁取り」は‘男のお振舞い’、「孫抱き」は‘女のお振舞い’**という表現をされる方もいました。



▲平成14年に当市域内で行われた「孫抱き」の様子

当市における「孫抱き」のスタンダード

＼当センター的勝手に／

「孫抱き」を経験した人が少なくなり、「孫抱き」という言葉を知らない人が増えているいま、当市における「孫抱き」がいったいどのような風習だったのか、ヒアリングや文献調査をもとに整理してみました！

※ちなみに当市出身の当センタースタッフ６人（20代～40代）のうち、「孫抱き」という言葉を知っていたのが５人、自分の誕生時に孫抱きをされていたのは３人、子どもがいる５人のうち、自分の子どもが誕生した時に祖父母に孫抱きをしてもらったのは１人だけでした。

時代別スタンダード

	～昭和初期	戦後～昭和中期	昭和後期～現代
対象となる「孫」	①初孫　②家督	①家督　②初孫	①初孫　②家督　③内孫全員
場所	自宅	自宅	①会館　②自宅
開催時期	産後1週間目（出産7日目）	里帰りから戻った頃の農閑期（首が座った後）	首が座ってから～1歳頃（お食い初め、一生餅と合わせて）
主催者（孫から見て）	祖父（祖父母）	祖父（祖父母）	①祖父母　②両親
参加者	①仲人（媒酌人）②両家の親族　③本家筋の女性　④親類女性		①親類女性　②招待した人
孫の衣装	着物（あわせ、綿入れ、つんぬぎ）		①ベビードレス　②お宮参りに行くときの着物

市内各地でヒアリングした結果、見えてきたのが上記表のような内容です。80歳台以上の方にも数人ヒアリングを行うことができたものの、「よく覚えていない」という回答が多かったのも印象的。というのも、赤ちゃんの両親の席はなく、裏方（料理の用意や接待、片付け等）を担当するため、里帰りから戻って早々のお嫁さんに至っては「言われるがまま……」という状態だったというお話も。以下、詳しく見ていきます！

仲人（媒酌人）さんに感謝を示す機会（だった）

▲昭和63年に当市域内で行われた「孫抱き」の様子。抱いているのは仲人さん。

「嫁取り」で重要な役目を担う「**仲人（媒酌人）**」さん。「孫抱き」においては最上位の来賓であったようです。仲人さんが上座に座り、お酒を酌み交わした後、祖母に抱かれてやってきた孫は、まずは仲人さんに抱いてもらいます。

この時、祖母（姑）は仲人さんに対し「**おかげさまで良い家督孫を授かりました**」というような挨拶を行います。つまり「孫抱き」は、結婚の際にお世話になった仲人さんに改めて感謝をする場だったのです。

しかし、時代と共に仲人を立てずに結婚する人も増え（立てても形だけ）、昭和後期には「孫抱きの主賓＝仲人」という感覚は薄れていったことが調査結果から見えてきます。

家の座敷　→　会館　→　孫抱きプラン

▲昭和50年代に当市域内で行われた家の座敷を使っての「孫抱き」。御膳も並ぶ。

かつては多くの家に「座敷」があり、嫁取りの儀式や祝言も座敷で行われていました。孫抱きも家の座敷で行われていましたが、いわゆる「会館」が普及すると、会館で行う家も増え、現在は市内の結婚式場等でも「**孫抱きプラン**」として、孫抱きを行う際の利用を歓迎しています。昭和20年代からそうしたプランを行っている会館もあり、昭和中期から昭和後期にかけて、自宅＜会館利用に切り替わっていったのではないかと推測されます。

ちなみに、家の座敷で行われていた頃には、お嫁さん方の祖父母からの御祝い品として嫁入り道具とは別に「**箪笥**」が贈られる（里帰りから戻るときに持たされた）ことも多かったそうで、その箪笥と、中に入れてきた赤ちゃん用の衣服が披露されたのだとか……！

家督　→　初孫　→　家督　→　初孫

▲「孫抱き」で着せる衣装。かつては嫁の実家で手縫いした。現代はドレスの着用も多い。

「孫抱き」は内孫全員に対して行うものではなく、かつては「**家督孫＝長男**」が産まれた時に行われたものであったようです。しかし、大正期の文献には「**初孫**」と記載されており、昭和初期には初孫が主流になっていたようにも見受けられます。ところが、当センターのヒアリング結果では昭和中後期で「家督」という回答が逆転。勝手な推測ですが、この頃は**生活改善運動**が進み、結婚式も簡素化されており、もしかすると「家督」を言い訳に、「孫抱き」を行わない家が増えた……のかもしれません。

そして最近では、少子化もあってか、「初孫」で行うだけでなく、**内孫全員**で行うなど、貴重な孫や子の誕生をお祝いしようという機運が高まってきているのかもしれません。

＜参考文献＞　大原町役場（1931）『大原町誌』/齋藤初美（発行年不明）『萩荘地区の葬儀・孫抱き手引き』/岩手県東磐井郡藤沢町（1981）『藤沢町史 本編下』/社団法人奥玉愛林公益会・奥玉老人クラブ連合会（1988）『奥玉村誌』/一関市（1977）『一関市史第三巻各説明Ⅱ』/真瀧村誌復刻刊行委員会　蜂谷艸平（2003）『復刻　真瀧村誌』

調査にご協力いただいたみなさん、ありがとうございました！